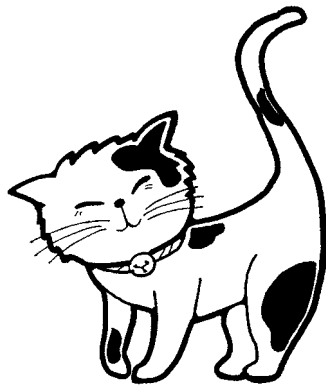


# みんなの童話

## ありがとう



自分から何かたのむことができないのだ。

「まゆ、買い物に行くわね」

お母さんは、買い物に出かけた。

テーブルの上のインコが、

「ゴハン、ゴハン」

と、言い出した。

「お母さん、わたしのことしんばいなんだ。チイちゃんにえさあげるのわすれてる！」

まゆちゃんは、そう言うとき

ケージに入れて、インコをゆびにのせた。

インコは、ばさばさと、はばたいてる。そして、リピングをひとまわりすると、まどから外にとんで行った。

「チイちゃん、もどって来て！お母さんがかわいがっていたのに、どうしよう？」

まゆちゃんは、ないている。

「マユちゃん、ナカナイデ。ナニヲシテホシイ？」

「おねがい、チイちゃんを助けて」「ワカッタ」

ぼくは、まゆちゃんの家の表札の住所を見ると、インコがとんで行った方向に走った。

インコは、男の人の手のひらの

中にいた。男の人は、インコを家に

つれてかえると、ケージに入れた。

「ニヤー、ニヤー、ニヤー」

ぼくは、インコにまゆちゃんの家の住所を教えた。

ぼくがもどると、まもなくお母

さんがかえって来た。

ピンポーン、ピンポーン

インターホンが、なっている。

お母さんが、出ると、男の人がケ

ージを持って立っていた。

「こんばんは。このインコこちら

のじゃあないですか？」

と、ケージをさし出した。お母

さんは、大声でまゆちゃんをよんだ。

「チイちゃん！」

まゆちゃんが、名前をよぶと、

「オネガイ、タスケテ、ミドリチヨ

ウイチノイチ、アリガトウ」

「まあ、チイちゃん、住所言える

ようになったのね！」

まゆちゃんもママも、目を丸く

して、びつくりしてた。

「オネガイ、タスケテ、アリガトウ」

インコは、くり返し言っている。

（そうだ。助けてって言えばいい

んだ。そして、ありがとうって）

まゆちゃんの顔ががやいた。

次の日の朝、まゆちゃんは、

「お母さん、おくらなくていいよ。

きのう仕事休ませちゃったでしょ。」

そう言ってランドセルをせおった。

「一人でだいじょうぶなの？」

「だいじょうぶよ」

まゆちゃんは、まつばづえを付

いて、

「行ってきまーす」

と、学校に出かけた。ぼくはお母

さんのかわりに行って行くことに

した。

学校についた。まゆちゃんは、

げんかんのげたはこの前でこまっ

ている。うわばきがとり出せない

のだ。げんかんには、だれもいな

かった。くつを出そうとしたとき、

バターン

ぼくのしっぽがぴくつと動いた。

まゆちゃんが、ころんだんだ。

「まゆちゃん、どうしたの？」

まゆちゃんと同じぐらいの女の

子がかげよった。

「あいちゃん、おねがい、うわば

きを取って」

「うん、いいわよ」

あいちゃんは、うわばきを出し、

まゆちゃんのくつをしまった。

ぼくは、教室の近くにある木に

登って、まゆちゃんのようにすを見

ていた。ころんだり、机をたおし

たりするたびに、しっぽがぴくと

した。でも、まゆちゃんは、おね

がいとありがとうと言って、えが

おだった。

しるやま会員 木村 久世